

2024年6月23日 印西牧の原教会 説教「この町には主の民が」

使徒の働き 18章 1～11節

初めて、御教会でのご奉仕の機会に恵まれ、感謝いたします。20数年前に、千葉ニュータウンに長老教会が与えられるように、牧師たち数人で祈ったことがありました。今こうして、小会を構成している教会が現実に存在していることを驚いています。さて今朝は、使徒パウロの第二回伝道旅行における、コリント宣教の記事から学んでいきましょう。

1. コリント宣教開始 (1～4節)

①コリント (1) 「その後、パウロはアテネを去ってコリントへ行った。」

コリントは、東西の海路、南北の陸路の結び目となる地でした。当然、通商、交通の要所でした。町は山裾にありました。そして、アシュタロテという女神の神殿がありました。また、コリントは風紀の面では乱れていました。それは「コリント人への手紙」を読むと、わかります。町にはローマの地方総督が駐在し、経済的にも繁栄していました。パウロがこの地の伝道に入ったのは、そこに宣教の可能性を読み取ったからであります。

②アクラとプリスキラ (2～3) 「ここで、アクラというポイント生まれのユダヤ人および妻プリスキラに出会った。クラウドオ帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命令したため、近ごろイタリアから来ていたのである。パウロはふたりのところに行き、自分も同業者であったので、その家に住んでいっしょに仕事をした。彼らの職業は天幕作りであった。」

アクラの出身地ポイントは黒海南部沿いの地でした。彼はユダヤ人で、妻はプリスキラといました。この夫婦はコリントに来る前にクリスチャンになっていました。彼らはイタリアのローマに住んでいましたが、クラウドオ帝がユダヤ人追放令を出した(紀元49年)ことにより、コリントにやって来ていたのです。パウロが彼らと出会ったのは、神の導きというしかないでしょう。というのも、彼らはキリスト教伝道の心を持つ夫妻でしたが、その生業は天幕作りでした。実を言うと、パウロも天幕作りを身に着けていたのです。天幕作りは、皮なめしの知識と技術が必要でした(R.E.ホック「天幕づくりパウロ」による)。パウロは彼らと天幕作りをしながら、共に宣教をするようになりました。

③会堂で論じ (4) 「パウロは安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人とギリシャ人を承服させようとした。」

パウロはコリントにおいても安息日には、ユダヤ人会堂で、ユダヤ人には聖書から、ギリシャ人には哲学を話題にしつつキリストを伝えました。

2. 信ずる人々 (5～8節)

①みことばに専念 (5) 「そして、シラスとテモテがマケドニヤから下って来ると、パウロはみことばを教えることに専念し、イエスがキリストであることを、ユダヤ人たちにはっきりと宣言した。」

同労者であるシラスとテモテはしばらくマケドニヤのベレヤに留まって



いました(17:14~15)。パウロは人をやって、助けにくるようにと伝えてありましたがなかなかかわらず、今ようやく二人はコリントに辿り着いたのです。この時に及んで、パウロは御言葉を伝えることに専念し、イエスがキリスト(救い主)であることをユダヤ人達に宣言しました。

②**暴言を吐くユダヤ人(6)「しかし、彼らが反抗して暴言を吐いたので、パウロは着物を振り払って、『あなたがたの血は、あなたがたの頭上にふりかけられ。私には責任がない。今から私は異邦人のほうへ行く』と言った。」**

ユダヤ人の中には、パウロが伝えるメッセージに反発し、暴言を吐いたりする人々がいました。かつては自らも同じような立場でしたが、キリストに出会ったパウロは熱心に愛の福音を語っていました。しかし、福音に耳を貸さない彼らに対し、決然と「あなたがたの血は、あなたがたの頭上にふりかけられ」と言い伝えました。つまり、パウロとしては語るべきことをユダヤ人達に語ったのです。それでも、キリストを受け入れない者の責任は本人達にあることを厳しく伝え、今後は異邦人伝道に力を注ぐと言ったのです。

③**ユストとクリスポ(7~8)「そして、そこを去って、神を敬うテオ・ユストという人の家に行った。その家は会堂の隣であった。会堂管理者クリスポは、一家をあげて主を信じた。また、多くのコリント人も聞いて信じ、バプテスマを受けた。」**

コリントでも主は必要を備えて下さいました。ユダヤ教会の隣にある家の人で、クリスチャンとなっていたユストという人が、パウロは歓迎しました。また、会堂管理者のクリスポの一家は揃って信者となりました。多くの人々が主の前に出て信仰告白をし、バプテスマ(洗礼)を受けたのでした。

3. コリントに腰を据え(9~11節)

①**恐れずに語れ(9)「ある夜、主は幻によってパウロに、『恐れなくて語り続けなさい。黙ってはいけない。』」**

ある夜のこと、主は幻によってパウロに語られました。「恐れずに語り続けよ。黙ってはいけない」。反対する者たちに屈してはならないと励ましてくださったのです。

②**わたしの民が(10)「『わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから』と言われた。」**

9節のお言葉の理由は、i.主が共にいてくださる、ii.危害を加える者はない、iii.この町には主の民がたくさんいる、というものでした。確信をもって歩んできたパウロでも、このような励ましを戴く必要があったのです。

③**一年半コリントに(11)「そこでパウロは、一年半ここに腰を据えて、彼らの間で神のことばを教え続けた。」**

パウロは伝道旅行において、一つの地には数か月滞在することが普通でした。しかし、彼はこのコリントには一年半、腰を据えて御言葉を教え続けたのでした。

《結論》

今朝の聖書箇所から、私たちは二つのことに注目したいと思います。

第一は、パウロがアクラとプリスキラ夫婦に出会わせられたことについてです。そして、彼らと天幕作りをしながら、宣教をしていったということです。数年前に召された矢島徹郎先生が「パウロの選択」という本を出されましたが、そこには自活伝道について書かれています。ご自分が塾などをしながら、伝道をされてきたことをパウロから学んだと証しておられます。私も40年余りの伝道者生活では、アルバイトをしながら宣教をしてきました。新聞配達、幼稚園での働き、塾などをやりました。フルタイムで働いている伝道者のことを聞くと少し妬ましく思うこともありました。でも、世の中で働くことは伝道者にとって一つの在り方なのだと思います。他では出会うことができない人々と会う機会があるからです。そこは重要な伝道地なのです。さて、パウロは天幕作りをしましたが働きの優先は伝道でした。一方、ここに出てくるアクラとプリスキラは、天幕作りを生業としながら、伝道に献身していました。時には、パウロに代わって伝道の先頭に立ちました。伝道は伝道者だけがするのはありません。教会の伝道において大切なのは信徒です。牧師や伝道者には会うことができない人々と知り合いになれるからです。以前から思っていました、印西牧の原の信徒の皆さんは宣教に献身的ですね。励まされます。アクラとプリスキラ夫婦がパウロの宣教を援助しつつ、時には宣教の前面で働いたことから学び、どんな立場にあっても、宣教への心を新たにいただいでいきましょう。

第二に、10節において主が、「この町には、わたしの民がたくさんいるから」と励まされた点に注目しましょう。パウロに主はこのように励まされましたが、私たちが同じ言葉を受けたとすればどうでしょう。否定的にならないでしょうか。「日本人は山でもきつねでも人間でも神にしてみよう。唯一神は信じられない」とか、「この国は沼地のようで福音はなかなか受け入れられない」などとつぶやき、自分の側で道をふさいでしまうことがあります。また「あの人は救われるはずがない」とか「あの人はキリスト教に興味を持つはずがない」とか、自分達の側で結論を出してしまうことがあります。でも元々、私達自身がそんな者たちであったのではありませんか。伝道は伝導ではありません。まずは、「道」を「伝えて」いきましょう。結果は主が与えてくださるのです。

日本長老教会の四日市教会の元牧師の堀越暢治先生は、四日市に遣わされて十年間は砂を噛むような日々であったと言っておられました。しかし、ある時、御言葉をいただいたというのです。それが「この町には、わたしの民がたくさんいる」でした。これを主からの約束だと受け取った先生は、神社仏閣が多い四日市の地における働きに創意工夫をして、積極的に進めていったそうです。次第に多くの人々が救われていき、御言葉の真実を味わったそうです。

「印西牧の原地域にある地という町には、主の民はたくさんいる」と信じて祈っていきましょう。また今回は講壇交換ですから、姉ヶ崎の地にも、主の民は大勢いると信じて進めるようお祈りください。主は、私達の教会を用いて、救いの業を与えてくださる信じ、祈っていただくではありませんか。